

WTO 決裂の靈的な意味

ニカノー・ペルラス

1999年12月3日、アメリカ・ワシントン州のシアトル市で、世界史に分水嶺として聳え立つような、関連する二つの事件を、世界は目撃しました。一つは、強力な世界貿易機構(WTO)による無比の君臨が、地球市民運動による無類の調和的行動主義の犠牲になって終わりを告げたことです。WTOが1995年に持っていた勢いを再び取り戻すには何年もかかるだろうと、専門家達は同意しています。二つ目は、WTO決議事項の失敗によって、地球市民運動が地球第三勢力としての役割を強める方向に向かって、大きな第一歩を踏み出したことです。この第三勢力は、WTOに現われているように、国家と市場という他の二つの勢力が全体主義的傾向を持つのに対して、それに対抗する勢力であります。

これら二つの歴史的事件は、靈的な現実が世界に現われた兆候であります。「シアトルの戦い」は人智学運動への素晴らしい期待を孕んでいます。この期待を実現するために、私達はWTOの背後にある地上的な力と靈的な力を理解する必要があります。

WTO と世界のアーリマン化

1941年アメリカ国務省内のエリートは第二次世界大戦後、アメリカは世界の政治経済大国として現われるだろうと考えていました。彼らは貿易、投資、金融市場を管理し、それによってアメリカの政治経済上、指導権を確立するための手段を提案しました。そのための機関が、私達の知る世界銀行であり、世界通貨基金、そしてWTOなのです。

数多くの一般協定(GA)を通して、WTOは経済の旗の下に社会生活を全体的に管理しようとしています。たとえばその一つである「貿易に関する一般協定(GATS)」は、教育のような文化活動に対して、統合的な管理を求めています。関税貿易一般協定つまりGATT-1994は、経済に公正な配慮を導入することから、国家の干渉を排除することを求めています。農業協定(AoA)は地球規模での食物生産において、社会的、生態的に有害な農法の続行を強めています。多くの貧しい国々が悪影響を受けるのはもちろんですし、人智学から生まれたさまざまな運動も、明らかにこのWTOの謀略によって、深く、悪い影響を受けることは明らかでしょう。

WTOが「経済の世界憲法」と言われて来たのはなぜか、今や明らかです。WTOは135加盟国のおのおのの憲法や法律を覆して、それによってそれらの国々の運命を決めてしまう力を持っているからです。

WTOの出現は私達の時代の靈的な運命の一部分です。シュタイナーは20世紀末について、そして人間性を汚水槽の中に引きずり込みたいと思う大勢の存在について語っています。これらの存在の中には太陽悪魔ソラト(666 × 3 = 1998)、アーリマンとマモン(強欲の神)がいます。シュタイナーは黙示録の7番目のトランペットが1994/1995年に響くだろうと指摘しました。これは、WTOが管理のための協議事項を有し、1994年に発足が決定されたWTOがキリストに対立する力の強力な手先であることを示しています。

これらのキリストに対抗する勢力は今、WTOの最先鋒に立ったアメリカ経済帝国の帝国主義的実践のうちに、自身の勢力の強力な放射点を見えています。靈的に見ると、英米の人々は、意識魂の力で経済生活を浸透させるという課題を担っているのです。第三後アトランティス文化期には秘儀参加者が、第四文化期には聖職者が、第五文化期には経済のリーダーが統治者であったとシュタイナーは指摘しています。そして中央ヨーロッパは「私である」の精神的な力を真に発展させる課題を遂行しているのです。これら二つの靈的力のセンターの間に靈的なパートナーシップが働いていたら、今日の意識魂の正しい発展へと導いていたことでしょう。

しかしながら、第一次世界大戦が介入しました。これは、英米両国民が優位になったことを、靈的に意味します。1945年以後は、アメリカは独占的な地球大国として聳え立つという方向修正は起きましたが。シュタイナーは、表面的支配の交代は自然の力の無慈悲さによって起き、靈的文化がそれに伴わないと有害なものになるだろうと言っています。中でもこのことは西洋が「東」から奴隷・農奴(healots)を生み出すということの意味し、今日30億の人々に救いがたいまでの貧困という形でその現象が広がっています。

ミカエルの対応

シュタイナーは、やがて来る7番目のトランペット

の響きに対する時代霊の対応について、詳しく明らかにしています。超感覚的学院で、時代霊は霊的学徒が二つの課題を遂行するための準備を与えました。まず第一に、20世紀末に一層大きな課題を遂行するための手段として、地球上に人智学を設立しなければなりません。次にこれらのミカエル戦士達は人間性が「文明の墓」に投げ込まれるのを防ぐために、人智学の霊的、文化的「頂点」をもたらすことが求められました。

しかしながら、この「頂点」は社会の三層構造がなければ成功しないでしょう。霊的文化は、文化生活が経済と政治の、またはどちらかの利益による指令から自由でない限り、成就不可能なのです。かくして、現在に至るまで三層構造のイニシアティブが歴史上、表面上失敗したことは、人智学の運命にとって、また人智学が20世紀末に時代霊とキリストのためにする課題にとって、巨大な障害物を置いたことになったのです。

市民運動勝利の霊的意味

「シアトルの戦い」の霊的意味は、今二つのレベルではっきりしています。WTOの敗北は、敵対する勢力とその地上の機関の邪悪な策謀が鈍って来たことを示しています。同時に、地球規模の市民運動の勝利は、市民社会で働く活気に満ちた文化の力を通して、ミカエルの力が今、社会生活の中に力強く入ってきたことを意味します。さらに、市民運動がグローバルな広がりを持つたということは、社会三層構造を通して、世界文明の中でミカエルのインスピレーションによる靈感を高めていく可能性を開いていることになります。

反対勢力はキリストの復活の力や時代霊ミカエルの導きを消滅させようと、20世紀を通してずっと忙しかったのです。その勢力はイギリス、アメリカ両国と中央ヨーロッパの両方の運命としての使命を腐敗させてしまいました。そして彼らの中からWTOを含むエリートによるグローバル化のための機関を多量に生み出しました。宇宙の叡知に導かれた霊的文化の上に築かれた、グローバルな経済の友愛的連帯のかわりに、1990年代に私達が見たものはWTOのような経済機関によって世界支配が始まったことであります。そして、これらの支配力が増大していくことは止められないし、

避けられないと思われていました。

その時「シアトルの戦い」が起きました。地球市民運動が衝撃を与え、そしてWTOの進路を即座に断ったのです。この勝利は偶然ではありません。『グローバリゼーションの形成：市民運動、文化力、三層構造』(“ Shaping Globalization: Civil Society, Cultural Power, and Three Folding ”)という本の中で、シアトルでのWTO会議は成功しそうなだろうと、筆者はすでに指摘していました。なぜでしょうか？WTOの背後にある勢力は大きな文化力としての地球市民運動の手によってすでに大きな敗北を被っていました。WTO勢力は別の機関によって身を隠していますが、多国間出資協定(MAI)として知られている別の協定を導入したいと思っていました。WTOと共にMAIは世界支配を渴望するエリート勢力に世界経済の全面的管理を与えていたことでしょう。

1998年のMAIの敗北は市民運動が地球の第三勢力の一つになる時代がやって来たことの兆しでした。シアトルでの1999-WTOの敗北は、世界舞台での市民運動の忍耐強い力、そしてこれから来るべきものの原型としての力を示しています。退廃的なWTOの敗北に際して中心的役割を果たしたことから見て、十分に、当惑するほど明らかなように、市民運動は気晴らしではありません。それどころか、国家レベルと地球規模のレベルでの三層構造を私達の時代に到達できる目標とすることのできるの、文化的領域を守り復活させようとしているこの新しく現われた忍耐強い第三勢力によってなのです。

しかしながら同時に、現在の形の市民運動は、シュタイナーが述べた言葉の最高の意味での理想的な「自由な文化的、霊的生活」を完全に表わしているのではないことは明らかです。それはむしろ、やがて来るものの極めて活気あふれる先駆けです。自由な文化的領域というこの理想的な目標を達成するのに助けるために、人智学は、人智学を生きた形で遂行する生き生きとした方法で人智学に基づいて行動する個人によって、市民運動の中に浸透していく道をより一層積極的に探さなければなりません。一層入っていく必要があります。私達の共通の努力が来る時代に新しく実を結ぶように、私達人智学徒が市民運動の中で行動する人達と協力し貢献するための大きな分野がここにあります。(“ Anthroposophy World- wide ”, June 1998,

“ Shaping Globalization ”を参照)

シアトル事件は、私達人智学徒にとって、靈的に呼吸のできる場所が生まれたことをも意味します。この呼吸のできる場所で、人智学運動はさらに大きな自覚と戦略的な意図で行動しなければなりません。いくつかの個人やグループが、やがて来る農業、教育、医療サービスに関するWTOの交渉を今、注目していなければなりません。人智学運動は、不健全な経済条約や協定によって行われる、自由な靈的・文化的生活に対抗する靈的勢力の容赦ない攻撃を阻止するために、三層構造の試みをあらゆるレベルで強めなければなりません。人智学運動は、エリートによるグローバル化の現実を考慮に入れるように、人智学から生まれたさまざまな運動を方向づけなければなりません。これら全てを実行する際に、人智学運動は自らの仲間を手を差し伸ばし、市民運動で働く個々のミカエルの人々にまで、手を差し伸ばさなければなりません。

意識魂の時代が展開するにつれ、個人の意図や行動が、世界的事件の将来を決めることが増えていくことでしょう。ですから私達人智学徒が、新しい千年紀の初めの10年に私達に向かってくる挑戦と機会を、どのように見るかが重要です。シアトルで20世紀末に、一瞬ですが、世界の意識に姿を現わした大きな靈的光に注目したいと、私達は願ってもいいのではないのでしょうか。不完全ではありますが、ミカエルの力のこの劇的な現われは、キリストの復活の力が有効に働いていることを、私達に思い出させてくれます。そしてこれを知ること、私達人智学徒は、どんなに暗く気の弱る瞬間でも、私達は孤独ではないと安心して、未来に入っていけます。むしろ、私達は地球の進化の

未来のために、竜との凄まじい戦いに直面するので、何百万の見知らぬ仲間はもちろん、ミカエルや他の靈的力と共に歩いていることを知ることでしょう。

(訳：中島宏子)

WTO反対のために集まったグループや活動家には、労働団体、環境・人権保護団体の活動家をはじめ、チベット解放運動の支援者など、その幅広さ、層の厚さは、ひとつの社会現象ともいえるほどの様相を呈していたと報道されています。この記事は、互いに共通項のないこれら市民活動家の連帯の謎に、精神科学の認識から迫るものです。

この記事を送って下さったのは、秋に日本で開催予定のアジア太平洋アントロポソフィー会議の呼びかけ人、ニコノー・ベルラスさんです。

ベルラス氏はフィリピン・オルタナティブ開発センター(CADI)の主宰者で、フィリピンの政策案の策定などにも関わっている方です。マルコス政権時代、亡命先のアメリカでアントロポソフィーと出会い、アントロポソフィーの社会学を学んだのちに帰国。以後、フィリピンの社会改革を政治レベル、市民運動レベルの両面から支援する活動をしています。その他にも、フィリピンのアントロポソフィーグループのまとめ役として、またヴァルドルフ学校と幼稚園の主宰者として、さらにバイオダイナミック農場の経営、イロイロライフ銀行の取締役と、数え上げたらきりがないほど多彩でパワフルな人物です。ベルラスさんは秋の会議にも家族とともに参加される予定で、どんな講演を聞くことができるのかとても楽しみです。

(編集)